
Suicide Game -Kazuya's Mind-

たち@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S u i c i d e G a m e - K a z u y a ' s M i n d -

【Nコード】

N 2 1 1 5 B

【作者名】

たっち@

【あらすじ】

夏休みがもう少しで始まる。誰もがそう感じている夏の昼休み、日差しが燦爛と地面を照らし、蝉の悲鳴が嫌と言うほど耳につく。そんな昼休みの些細な出来事から長い長い三日間が始まった……。

Episode 01 現実と過去

昼間なら騒がしい長い廊下が、今は不気味なほどの沈黙の霧に覆われている。大きな長方形の窓からは、月の黄色い光がぼんやりと差込み、光と闇の明暗が未知の空間を造形していた。

そんな不気味な闇の中、俺は教室の壁に寄りかかり、地べたに座り込んでいた。なんでこんな事になっているのか、自分でも分からない。誰もこんな事になるとは予想できなかっただろう。

生臭い鉄の匂いが漂い、床や壁には黒光りした液体がぶちまけられていた。目をどこに向けようと、入り込んでくる光景にまともなものはない。もう何回吐いただろうか。吐くたびに血の匂いと残酷な光景が、すぐに嘔気を催した。

こめかみから頬へと何かがたれる感触。その感覚は滑らかにあごの下へ向かって行き、最後にはズボンの上にポトリと落ちていった。汗なのだろう。この汗が暑さによるものなのか、それとも恐怖による冷汗なのかは考えなくとも分かる。震えるような感覚からするに冷汗なのだろう。

「……どうしてこんなことになったんだ」
静けさが漂う淀んだ闇の中、俺はつぶやいた。

——すべては、三日前。夏休み一週間前の木曜にさかのぼる。

俺は昼寝をするために机に寝そべっていた。窓側の後ろから二番目である俺の席は、昼寝には最高の席だ。カーテン窓越しの柔らかな光と、校庭から流れ込む風はこの席の専売特許だろう。昼休みの教室というものは騒がしいものだが、自然と自分の周りに人は寄ってこなかった。自分では自覚がないのだが、どうにも俺は寝起きが悪

いらしい。次の授業は居眠りに無頓着の川田の数学、昼寝を妨げるものは何もない。必然と睨がすべり、闇の世界を通り抜け架空の世界へと向かっていく。

普段ならその筈だった。

しかし、この日の昼休みは少し違っていた。

いつもなら、チャイムと同時に一目散に屋上に向かっていく修が、この日はなぜか自分の席に座っていたからだ。何故という疑問が湧きあがり、耳を軽く向けると理由は容易に推測できた。誰かの談話をしているようなのだ。

話し声は相手は透き通ったかわいらしい声の持ち主で、その声は以前どこかで耳にした声だった。誰の声なのか。肝心なところが思い出せない。

サッカー部の期待の星。姿のいい修のこと容だ、なんら驚くことはない。

所詮、特に何のとりえもない俺には無関係の話だ。

と思いつつも、自然に耳が行ってしまう。

男なら当然の反応だろう。

「…じゃ、…日曜……夜…校庭……。和也君も誘ってね。」

高い声から察するに、女の子だろう。音量が小さいその声からはすべての内容を聞き取ることは困難だった。ただ、自分が何か関わっているということ、それが日曜日にあるということは、何とか聞き取ることができた。

女の子との会話に自分が関わっていることは正直うれしかった。過剰反応だと自分でもわかりながら、容姿、学力、運動神経どれにおいても自信が持てなかった俺は、そのことを軽視することはでき

なかったのだ。

自信がないといっても、まったく駄目という訳ではない。この学校のが異常なのだ。

中学時代までは勉強も運動もできるつもりだった。

定期テストに至っては十番以下に落ちたこともなかったし、三年間所属してたバスケット部でも一年次からユニフォームをもらい、二年次からは常にレギュラーだった。

正直、中学の時代はもてた、という感触を大いに感じることもできた。ただ、あのころはそんなことにまったく興味はなかったのだ。

この高校に入ること、そのことだけを目標に三年間を生活していたからだ。

そして、この爽美高校に入学した。

暗い現実が待ち構えているとも知らずに……。

いつからだろうか、こんなに『もてたい』なんて感情がわいてきたのは……。

そうこう過去のことを思い出している内に、いつの間にか眠りに落ちてしまった。

Episode 01 現実と過去（後書き）

はじめの作品です。

まだまだわからないことばかりなので、感想などでおかしなところの指摘お願い致します。

私生活の関係上更新はスローペースですのでご了承ください。
読んでる方が居ればの話ですが……。

また、本文の感想、評価もお待ちしております。

Episode 02 嘘と秘密

どのぐらいたったところであろうか。
ちようど夢という名の湯船に脚を入れかけたとき、背中に激痛が走った。

この痛みは以前にも体験した覚えがある。
プールでよく体験する痛みだ。

ワイシャツ1枚の力はずくづく大きいと実感することができたが、やり場のない怒りが後ろの席へと向かう。

振り向くと、そこには修が無邪気な笑顔で座っていた。

脚を組み、手を頭の後ろに回し、椅子の背に深くもたれかける様子は、いかにも偉そうに見える。

「おさむ？ 俺の睡眠を妨げるってことはどういうことが知ってるよな？」

ふと時計に目をやると、昼休みの半ばを過ぎたぐらいであった。
教室前方ではクラスの女子が夏らしく怪談話で盛り上がり、教卓の前ではいつものように委員長が前の時間の質問をしている。修が後ろの席に座っている以外は、いつもとなんら代わりのない様子が広がっていた。

背中に季節はずれのもみじを作られるだけでなく、十五分程度の睡眠しかえられなかった俺は最高に不機嫌だ。寝起きすぐの半開きの目で修を軽く睨みつけた。

しかし、そんなことお構いなしに修は笑っている。
修の変わらない無邪気な笑顔で、俺は拍子抜けしてしまった。
なんだかんだ言って憎めない奴だ。

「まあ、落ち着けよ。面白い話があるんだぜ？」

不意にそう切り出すと、修は人差し指で俺を手招きした。

「何だよ。普通に言えよ」

「この話はちよーっとトップシークレットなんだ。ちよい耳かせや」

修の焦らす癖は正直嫌だ。

さっきの怒りも完全に収まったわけではなかったし、修の行動は癪に障るものだった。

しかし、どう考えても面白いことというのは、さっきの女の子との会話のことなのだろう。

そう考えると、どうしても修の誘いを拒否することはできなかった。あの出来事がどうしても頭から離れない俺は、徐に修の口へと耳を運んでいく。

「日曜の午後6時に校門の前集合だ。いいな？」

そう耳打ちすると、俺を冷やかすかのように俺の肩を強く二回ほど叩いた。

俺の意にまったくそぐわない返答に、一瞬困惑した。

「は？ それだけか？ もっと詳しく教えろよ」

「あせるなよ。詳しい話は日曜の六時だ」

そう言うのと、修は俺の心情を覗き込むかのように俺を見める。俺の不満そうな顔に満足したのか、また口を開いた。

「わあーたよ。もうひとつビックニュースだ」

「なんだよ。言う気あるんだったら早く言えよ！」

「聞きたいか？」

「当たり前だろ。焦らすのもいい加減にしるよ」

修の焦らしはいつものことであるが、睡眠不足で頭がうまく回らないせいか、いつもより気が高ぶっているのが自分でもわかった。そのせいで、もどかしさがつい強い言葉になって現れてしまう。

「今日は一段と期待通りの反応だな」修が冷やかすように言う。

「話す気ないんだったら俺は寝るぞ」俺の我慢も限界に達していた。

さすがにその気配を察知したのか、修が切り出す。

「まず、一つ目だ。お前の大好きな馨ちゃんがくる」

「おい！ ばっ…回りに聞かれたらどうすんだよ。俺が馨ちゃんのこと気になってるって、女子にでも聞かれたら厄介だろ！」

そう囁くような小声で修に釘を刺した。殺人者が犯行現場を目撃されていないか確認するかのように回りを見渡す。

左から後ろへと首を回していくが、みな自分たちの話に夢中になっていて、こちらを意識しているようには見えない。

映画俳優並みの演技だろう。

そう感じている自分を内心は嘲け笑っていた。

自然に修へと視線が戻る。

しかし、そこにはいつもと違うまじめな顔をした修が、ずっしりと腰をすえていた。

「な、なんだよ」

不自然な修の表情に恐怖をかんじたのか、思わず声が出てしまう。

「お前さあ。本当に馨ちゃんのこと好きなのか？」

修は真剣な目でこう言い放った。

あまりに唐突な質問に、気が動転した。

「あ、ああ。何でだよ……何でいまさらこんなこと聞くんだよ？」
修の不意をつく質問に、俺はしどろもどろに答える。

「ん？ まあ、ちょっとした疑問だよ。気にすんな」

そう答えてはいるものの、修の拳動は明らかに納得しているものとは思えなかった。

目があちこちに泳ぎ、顔も明らかに不自然な笑顔を造形していた。

——嘘だ——直感的にそう思ったが、声にするような勇気を俺は持ち合わせていない。

尚更、自分も嘘をついている状況でそんなことを言えるはずがなかった。

——修の思っていることはたぶん正しいだろう。

実際、たぶん俺は馨ちゃんに対して“特別な”感情は抱いていない。

高校生にもなれば、好きな人や彼女などの話でよく盛り上がるものだ。

ひとつの机を囲み、何人かの男子が、自分の彼女自慢、好きな人への憧れなどを語っていく。

こう表現するとなぜかロマンチックだが、実際はそんなもんじゃない。

好きな人が一度バレてしまうと、その人と話しているとき、こっそりと見つめているときなど、冷やかされ、毎日の会話のネタにされる。

中学時代そんな経験をしたことがなかった俺は、高校に入ってすぐに体験し、傷つけられた。

表面はおちゃらけていたが、内心は違った。

それからだ、俺が嘘をつき始めたのは……。
馨ちゃんが好きだと、修には言っていたが、本命はまた別にいたのだ。

大澤 麻奈美というサッカー部のマネージャーをしている子だ。
修は高校に入ってから一番の友達だ。

しかし、修と麻奈美ちゃんの関係上、そのことを修に話すことはできなかった。

何回修に打ち明けようと思ったことが……。

しかしそのたびにあのトラウマが俺に話すことをやめさせた――

「……い和也、……………か？」

ぼんやりとした闇のなか、どこからか聞き飽きた声が聞こえる。

「おい和也、……………のか？」

鳴り響く声に、徐々に闇の霧が晴れていき、ふと我に返る。

「おい和也、聞いてんのか？」

「お、おお」

壊れたテレビを叩くように手のひらで頭を軽く叩きながら、何とか答えた。

「お前大丈夫か？　なんか今おかしかったぞ？」

前腕を机の上に乗せ、机に寄りかかりながら、修は俺のことを皮肉った。

「お前のせいで睡眠不足なんだよ」

「じゃあ、二つ目は言わなくていいのか？」

「なわけねえだろ。早く言えよ」

「お前もせっかちだねえ」

「お前が焦らすからだろ！」

「わあーたよ。二つ目はニュースというかヒントだな。『五年に一度』だ」

修は自慢げな目で、軽く言い放った。

「五年に一度？ それだけか？」

俺は頭をフル回転させ、『五年に一度』が何のことを思い出そうとする。

「ん？ ああ。大ヒントだろ？ どうだ、大体わかったろ？」

「いや？ なんなんだ？ 『五年に一度』って」

いくら考えても、何のことかわからない俺がこう答えるのは当然だった。

「おまえ……マジで言ってるのか？」

修は目を丸くし、驚いた様子で俺を見ていた。

「嘘言ってるすんだよ」

鼻で笑うように切り替えた。

修は俺の予想外の反応に失望したのか、不満そうな表情を浮かべている。

暫くの間——三十秒ほどであろうか——黙り込んで考え事をしていくようだった。

次をどう焦らすかでも思いついたのだろう、不意に切り出す。

「そうか。まあいい。後は自分で調べる。そうすればわかってくるだろ」

「調べろってどう……」

突如、聞きなれた鐘の音階が会話をさえぎるように木霊した。五時限目が近いことを知らせる予鈴だ。

「まあ、がんばれよ」

再び俺の不満そうな表情に満足したのか、修は微笑しながら肩をポンポンと2回叩く。

「はいはい。わかりましたよ」

『はあ……』と軽いため息をつきながら俺は二つ返事した。修は頑固だ。

ここからいくら粘ったところで教えてはくれないだろう。むしろ、これだけ話せば修にしては大出費だ。

そう感じるなり、すぐさま横を向いていた体を元に戻し、再び机へと寝そべった。

カーテンの隙間から見える空は青く冴え渡り、夏の風物詩の大きな入道雲が偉そうにその空間をのさばっていた。校庭から漏れるオーラで景色は歪み、蝉の鳴き声が嫌と言うほど耳に入ってくる。

こんな中、校庭から吹いてくる風は最高に心地よかった。

夏の暑さとともに心の靄つきまで吹き飛ばしてくれる、そんな風だった。

暫くして、蝉の悲鳴を遮るかのように、五回目の沈黙を知らせるチャイムが鳴り響く。

教室は徐々に静かになり、本来あるべき静寂な空間へと変化してい

く。

そんな中、俺の瞼が落ちていくことは必然だった。
だんだんと見ていた景色が闇に包まれていく。

そして俺は四十分遅れの眠りについた。

Episode 02 嘘と秘密（後書き）

今回は無駄な会話が少し多いかもしれませんが。
作者の技量不足です。

厳しい、感想、評価お待ちしております……

Episode 03 光と闇

「ん……。んん。ああああ。」

両腕を上方に放り投げ背伸びする。

長時間圧迫されていたせいだろうか、腕がうまく動かない。

どのくらい寝ていたのだろうか、そういう思いを巡らせながら目を開いた。

いきなりの出来事に、状況がうまく把握できなかった。

「おい……。嘘だろ」

そこには静寂な闇の立体空間に、鉄と木でできた冷たい造形物のみがのさばっていた。

「普通……。誰か起こすだろ」

自然とクラスメイトへの失望の言葉が漏れる。

いったい今何時なのだろうか、その疑問を解決しようにも、教室に二つあるはずの時計がどちらとも取り外されていた。

無意識にズボンのポケットへと手が向かう。

モゾモゾと手探りで携帯電話を探すと、サイドボタンを押しながら視界に入る位置に運んでいった。

（…………おかしい）

押すと同時に白い閃光を発するはずのサブ液晶が、いくら押しても沈黙を保ったままだった。

「…………マジかよ。今朝充電したばっかだぜ」

絶望の言葉を吐き捨て、携帯を机の上に置いた。

恐る恐る立ち上がろうとする。

案の定、足が鉛のように重く力を入れても動こうとしない。

（こっちもかよ）

ゆっくりと臀部を滑らし、椅子に浅く凭れ掛けた。

脚を伸ばし、血流を巡らせていく。

徐々に熱が太股から足先へと伝わっていき、感覚が戻ってくる。

なんとも気持ち悪い感覚だ。

辺りの光景とその感覚が共鳴し、いつそう不気味さが増していく。

（早く帰ろう）

すぐさま机から教科書を引きずり出し、鞆に無理やり押し込んだ。

脚の感覚が戻るや否や、急いで椅子から立ち上がり、後方のドアへと脚を運んでいく。

相変わらず、蒟蒻のような脚だが、さっきよりは十分ましに動いた。

ドアを潜り抜け廊下に出ると、その不気味さは少し和らいだ。

廊下伝いに並んでいる大きな窓から月の光が僅かに注いでいたからだ。

窓から注ぎ込む黄色い光は廊下全体を明るく照らしていた。

廊下の突当りにある職員室に自然と目が向かう。

（生徒が居ないこと確認してから帰るだろ。普通……）

職員室のドアは固く閉ざされ、廊下の途中から完全に闇と一体化している。

それを確認するなり、職員室の反対の方向に歩き始めた。

普段の下校だったら、職員室の前にある階段で一階の下校口へと向かっていく。

今向かっているのは完全に逆方向だ。

俺は知っていたからだ。

一階には対人センサーと防犯カメラがあり、下手に通ると警報機になる仕様になっていること。

二階、三階にその罫は仕掛けられていないこと。

一箇所だけ安全に外に出ることが出来るルートがあること、などをだ。

俺はよく修たちと無人の学校に忍び込んでいた。

誰も居ない学校は誰にも邪魔をされない遊び場と化す。

俺たちはそこで、いろいろな悪行や、くだらない遊びを楽しんだ。

例えるなら、この学校は自分の家の庭のような存在だろう。

しかし、今は同じ空間とは思えぬほど不気味な靄が漂っている。

普段、忍び込んでいたところとは違う点が二箇所あったからだ。

いつもは、夜でなく昼であったこと。

一人ではなく、二人以上であったことだ。

その二箇所が違っただけで、庭は見知らぬ立体構造物へと変化していた。

そのせいなのか、自然と足の動く速度が早くなっている。

鼓動のリズムが嫌でも嫌でも伝わってくる。

ついには走り出し、誰もいない長い長方空間にシューズと面とのぶつかる音だけが木霊した。

渡り廊下を通りぬけ、第二校舎の廊下の端へと向かって息を切らせる。

月の光が入らない第二校舎は薄暗く、俺の心をいつそう焦らせた。薄暗い空間が延延と続いている。

闇の中を目的地に向けて必死に足を動かした。

あの場所を確認しながらゆっくりと減速していく。

たどり着くや否や、施錠を外し、窓を開けた。

突如、強い風の壁が押し寄せる。

体育館へと続く渡り廊下、その屋根が唯一の脱出ルートだった。

窓から乗り出し、淵に手をかけると壁伝いに足を滑らせていく。

屋根に足がつくと、緊張の糸が切れたかのようにほっと肩をなでおろした。

ゆっくりと窓を閉める、手を膝に突き立て方で大きく息をする。

ワイシャツの袖を捲り上げ、額の汗を手の甲で軽く拭いた。

頭に響く心臓の鼓動。乱れる呼吸。

急激な運動に慣れてない体からは、汗がマグマのように噴き出していた。

暫くの間、深呼吸をしながら徐々に呼吸を整えていく。

呼吸がある程度整うと、歩きなれた通学路を歩くように屋根をわたりはじめた。

別に何かが起こるということを決め付けていたわけではない。

ただ、無事に脱出できたことは心に大きな安堵をもたらした。

空を見上げると、大きな卵形の月が黄色い閃光を放っていた。

いつもより明るい空には、小さな宝石たちがその光に闘いを挑むかのように微かに光っている。闇の校舎とは裏腹に、校庭には薄暗い光の世界が広がっていた。

さっきまでの光景が、まるで嘘であったかのような校庭の姿。その姿はさっきまでの焦りを完全に吹き飛ばした。

気づけばゴールはすぐそこまで見えていた。

ちょうど、体育館のベランダに差し掛かった時だ。
いつもとは違う感覚、ある違和感に気がついた。
ポケットの違和感。

ゆっくりと手のひらをズボンに押し当て、を股の付け根から腰のほうに近づけていく。

「……ない」

まさかという感覚とともに顔が青ざめていくのがわかった。

沼の鯉をすくう様に鞆の中を確認する。

そこにもやはり“あれ”はなかった。

記憶の奥底から、ついさっきまでの記憶を引きずり出す。
教室から廊下、窓から脱出するまで記憶を脳内でシミュレートしていく。

（最後にあつたのは……）

「——教室だ」

そう言葉を漏らすと、ついさっき出てきたあの窓を見つめた。

Episode 03 光と闇（後書き）

次の投稿は結構スパンがあくと思います……
気長にお待ちください。

本当に読んでる方が居ればですが……

Episode 04 風と月

暫くの間——二分ほどであろうか——窓を見つめながら、頭の中で物事を整理した。

どうするべきだろうか。

そこまですべき価値があるだろうか。

自分の心の中でその疑問を解いていく。

（さっきだって、結局何もなかったじゃないか）

自分の心に強く言い聞かせる。

（ほんの五分。勇気を出せば……）

“あれ”は決して遠くにあるわけではない。
どこに置いたかも、はっきりと覚えていた。
しかし、“あそこ”にはもう戻りたくない。
強い葛藤が心の中で沸き起こっていた。

ふと、空を見上げた。

白い影がちらほらとろつき始めていたが、柔らかな光を発し続けている。

「よし！」

大きく深呼吸し、鞆を体育館のベランダへと投げ捨てた。

体を百八十度反転させると、ゆっくりとあの窓へと足を進めていく。

俺は戻ることを決意した。

決意を固め、満を持してゆっくりと窓へと歩いていく。

——その時だ。

軽い圧力とともに、風のこすれる高い音が聞こえた。
突如、校庭の木々がざわざわと音を立てて騒ぎ始める。
髪の毛は乱れ、少し大きなワイシャツが肌に張り付いた。
校庭はさっきまでの静けさを失い、違う姿を見せようとしていた。

いきなりの豹変ぶりに一瞬、躊躇いの気持ちがある。

窓に手を掛けるとゆっくりとスライドさせた。

ここまで来た以上、引き返すことはできなかった。

開け終わるなり、逆の工程をたどる。

縁に手を掛け、上半身から校舎に押し込んでいった。

まだ先ほどの疲れが残っているのか、上手く力が入らない。

やつのことで校舎に転がり込むと、徐々に顔を上げていく。

薄暗い闇の道。

ついさっき、必死になって駆け抜けた廊下を見つめる。

先ほどは分からなかった細かな情報が目から入ってきた。

月の反射光の所為か完全な闇というわけではなく、薄暗い空間が長々と続いていた。

（急ごう）

徐に立ち上がると、闇に向かって足を踏み出した。

一歩また一歩と足をを進めていく。

やはり、この不気味悪さの所為なのだろうか。

ゆっくりと動かしていた足のピッチがどんどん上がっていた。

この空気に慣れることは決まっていなかった。

闇の中、黙々と足を動かす。

荒れる息。再び木霊する靴の音。

所々には、先ほどは気づかなかった警報機の赤い光が、薄暗く周囲を照らしていた。

なんとも嫌な光だ……。

百メートルほどあっただろうか、なりふり構わず全力疾走した。

月の光が差し込む角を曲がると、渡り廊下を駆け抜ける。

辺りの景色が段々と明るくなっていくのを感じた俺は、足のスピードを緩めていった。

大きく肩を上下させながら光が差し込む廊下を歩いていく。

「はあ……はあ……はあ」

先ほどは靴音だけで騒がしかった空間に、静けさが戻り呼吸音だけがただただ響いていた。

その角を曲がれば教室までは目と鼻の先のようなものだ。

安堵するのはまだ早かったが、あの廊下を越えられたことで、緊張の糸はほとんど切れ掛かっていた。

ここからでも見える大きな窓からはあの光が廊下を包み込むように照らしていたからだ。

決して明るいわけではなかったが、瞳孔が開ききっている目には、十分な明るさだった。

角を曲がると、先ほどと変わらない夜の光の世界が広がっていた。

二つ目の教室。それが俺の教室だ。

確りとクラスのプレートを確認すると後方の扉へと向かっていく。相変わらず大きな息遣いで一步一步足を進めていった。

最後の角を曲がろうとした時だ、さすがに緊張の糸が切れてしまったのだろう。

視点が定まらなくなり、体がふらつくのを感じた。

目の前がいきなり震えだし、地震が起こったようだった。

思わず扉の縁に手が向かう。

右手が縁に向かうと、左手は自然と膝に凭れかかっていた。前かがみになりながら再び大きな深呼吸をする。

（流石に、全力はキツイわ……）

運動から長く遠ざかっていた俺にとって、百メートル二セットというメニューは肉体に予想以上のダメージを与えていた。ワイシャツの第二ボタンを外し、下あごを軽く拭う。

視線を少し上げると、地面に薄い影がパントマイムをしていた。そんな光景に微笑しながらゆっくりと起き上がっていく。俺の不安は完全に取り除かれていた。

「……。」

そんな安堵も、この状況では長くは続かないものなのだろうか。突如、何か違和感を感じた。

急いで振り返り、辺りを見渡す。

（気のせいか……）

先ほどの光景となんら変わりはなかった。

強いて上げるならば、唯一木霊していた荒い呼吸音が消えていることだろうか。

そこはすっかりと静寂な空間へと逆戻りしていた。

ほっと胸を撫で下ろし、振り向いていた体を元に戻そうとする。

（……！？）

一瞬の出来事に自分でも何が起こったのかわからない。
気づいたら自分は闇の世界の中にいた。

（月の光は――）

大きな窓越しに空らしきものを見上げる。
先ほどまで希望の光を発していたはずの月が消えていた。

（嘘だろ……）

もっと早く気づくべきだった。

大きな雲が空全体を厚く覆っていた。
雲の薄みから覗く微光は闇を消し去るにはあまりにも少なすぎた。

辺りは完全に夜の世界に包まれた。

さっきまで見えていた場所が見えなくなり、見えなかったものが見え始める。

廊下の奥で赤い光が微かな光を放っていた。
警報機の放つ光だというのは頭でも分かっている。

第二校舎でも見た。

しかし、ここでそれが見えているという事実は俺を地獄へと突き落とした。

忘れかけていた『恐怖』という言葉と感覚が、心の中で浮かび上がってくる。

ほのかに見える、無意識に開けっ放しの扉を潜り抜けると、一目散に教室の端へと向かっていた。

Episode 04 携帯と男

「痛って！」

見えない無機物に軽い歓迎を受けた。

ガタン！ガタン！バン！

硬いものが床に叩きつけられる音が夜の教室に響く。

光を完全に失ってしまった空間は、そこが教室であるかさえも分からない。

視覚という感覚を完全に失い、頼りになる物は触覚だけになっていた。

その触覚でさえこの状態では役に立たないようで、足を進めることに何かしらにぶつかるといいう状況だった。

だが、こんなことでグズグズしてられない。

(……早く……)

昼間の教室の姿を頭の中で描きながら、体に染み付いている記憶を元に、足を進めた。

何個めだろう。ガタン！バン！と大きな音を立てながら机や椅子が倒れていく。

そんなことを気にする余裕もなく、両手で辺りを確認しながら、少しでも情報を得るために模索した。いくら模索しようとも手に触れるのはありふれた木と細い鉄パイプの感覚のみで、現在位置を確認することが出来るような触覚にたどり着けない。魔法の森で同じルートを何度もさまよっているかのような感覚が頭をよぎった。……

いやな気分だ。

がむしゃらに手探りをしていた時だ。宙を泳ぐ指先に微かな感覚が走った。

今までの硬い無機物質とは異なる柔らかな感覚だった。

（布……カーテンか）

深く考えることなくカーテンという答えを導きだした。

どうやら窓側まではたどり着けたようだ。

窓側には全部で六席の机がある。後ろから二番目である自分の席を探し出すためには……。

何故だろうか、焦っているはずなのに思考ははつきりしていると自分でも自覚できる。

後は簡単だ。窓側の壁にあるスチームストーブさえみつければいい。教室の前後に一つずつある大きなスチームストーブ。このストーブの上に書物の山があったなら、即ち横は俺の席だ。

探っていくとすぐに山のように積み重なった教科書を容易にみつけることができた。

ロッカー面倒くさがっていたため自然にできたこの山が、こんな事に役に立つとは夢にも思わなかった。

たどり着くとすぐさま机の上で掌を泳がした。

闇の中に潜む“あれ”を探し出すために、必死で手を動かす。

ついさつきまで見方だと思っていた奴等が、瞬時に寝返った。いきなり光の世界から闇の中へと放り込まれた俺の心はそんな気分だった。

（！！）

小指に“あれ”が当たる感覚が走った。

（あった……）

存在を確認したときだ。

ガ、ガカン……

プラスチック音が周囲に木霊した。

「おい嘘だろ！」

再び、俺の心は地獄の底へと突き落とされた。

俺の小指に強くぶつかってしまったのだろう。

無常にも“あれ”は闇に包まれた広すぎる面の上に落ちていったのだ。

手を振り回し、辺りに何もないことを確認するなり、すぐさま跪き、四つん這いになって模索する。落下音から場所は絞り込めたが、机の上よりは何倍も広がった。

机の上でさえ探し出すのに苦労するこの闇の中で、ここから探し出すことを考えると気が滅入りそうになる。いくら弱音を吐こうとも、すぐに見つかるというわけでもなかった。

今の自分に出来ること、指先に全身系を集中させたただ黙々と腕を動かす。

窓側の壁から手で闇の中を探っていった。

(!!?)

指に何かが当たる感覚が走った。

予想もしない展開に胸が高鳴る。あの感覚は紛れもなくあれの感覚だ。

より注意深く手探りでその付近を模索すると、また滑らかなプラスチックの感覚を感じ取れた。

指で正確場所を確認し、ゆっくりと握り締める。

（あつた……）

もう落ちる場所はない。

すかさず胸元まで寄せ両手で包み込むように握り締め、急いで携帯を開いた。

感覚しか感じとれない見えない携帯電話。視覚という感覚がないため上手く実感が湧かないが、この手触り、凹凸から考えても間違いない携帯なのだろう。

（ついでくれ！）

定かではない記憶を元に電源ボタンに指を押し当て、ひたすら祈った。

震える手で確りと握り締めながら、画面だけを見つめていた。

（だめか……？）

諦めかけたときだ。

眩しい鮮やかな光が液晶画面から放たれた。

左端には現在の時刻を告げる数字が浮かび上がり、暗い教室の一角が僅かな光に包まれる。

電池の残量は限りなく無に等しいようで、赤くなっている。

二十時五十七分

（これで帰られる）

今日何度目の安堵だろうか。

携帯と光を手にした俺は、無心でそれらを見つめ、壁に寄りかかっていた。

なぜだろう、心の中に『恐怖』という文字の欠片さえ感じられない。立ち上がるうとする気力すら湧いてこなかった。

これからどうするか……。

ゆっくりと闇の中を歩いて出ようか。

さっきの様に、急いで廊下を走りきるか。

どっちにしてもあまり変わらない……。

『何も起こらない』そう確信した俺は今までの自分の行動が馬鹿馬鹿しく思えた。

「なに焦ってたんだろ……俺」

軽く吐き捨て、自分を嘲笑え笑いたい衝動に駆られた。

その心境を察知したかのように、扉から僅かな光が注ぎだす。

どうやらあの厚い雲も抜けたようだ。

徐々に分からなかった教室の姿が露になってきた。

俺が通ったと思われる場所の机や椅子がなぎ倒されている。

机からは、教科書やノートなどが放り出され、床一面に散乱していた。

「あああ。やつちまつたな」

俺は微笑しながら、呟いた。

これを片付けようか、片付けまいか、しばし頭の中で考えるが考える必要もないことに気づいた。

どうせ俺がやったなんて分かるやつはいない。片付けたとしても、その情報が誰の耳に入るわけでもなかっただの労力の無駄になってしまっただ。まして、いつまた月がなくなってしまうかわからない状態でそんな偽善行為をするほど俺の心は広くはなかった。

ゆっくりと立ち上がると、教科書類を踏まぬように足元を確認した。見るからに教室の後方は足の踏み場がない状況だ。必然的に体を反

転させ、教室前方の扉に向かおうとした時だ。

「うわ！？……びっくりした」

不意の出来事について声が漏れてしまった。

そこには誰かがいる。闇の中でぼんやりと見える服装から推測するに、たぶん男子だろう。

この時間に俺以外に学校に生徒が残っているのは不思議であったが、この状況で声をかけないわけにはいかない。下手したら自分がしたことをクラスのみんなにばらされかねない。

「脅かすなよ。いるんだったら言えよ。ビビるだろ！」

「……………」

いくら言葉をかけようとも、声が返ってくることはなかった。その男は下を向いたままで、まったく動こうをしない。手は肩にぶら下がり、肩には不自然なほどに力が入っていなかった。

正直、気味が悪い。こいつはいったい何を考えているんだ。

「おい。マジでふざけるのいい加減にしろよ！」

そう声を荒げ、肩を怒らせながらその男の方へと足を進めた。

近づくにつれてその男の姿がうつすらと見え始めると、後悔の念にかられた。

自分より二十糎は背が高いだろうか、肩に力が入っていないものの、がたいも俺より大きそうに見える。ほかのクラスのやつだろうか、はたまた上級生なのだろうか、少なくとも同じクラスにこんなにかいやつはいなかった。しかし、ここで引いたら見下されてしまうだろう。何ビビってんの？そんな返答が返ってくるに違いない。引いちや駄目だ。引いちや……。

男は固まったままで一行に動く気配がない。

(ん?)

ここである異変に気がついた。

男の足元からは前方の扉から注ぎ込む微かな月の光が見えていたからだ。

(足が……ない?)

そんなはずない。ありえない。幽霊なんて居るわけが……

なんども自分に言い聞かせるが、目を擦ろうとも、頬を抓ろうとも足は見えてこない。

宙に浮いてる? 本当に幽霊なのか……?

視線を徐々に上げていった。

するとあることに気づいた。

さっきまでは闇に隠れて見えなかったが、黒い糸のようなものが天井から一直線に男へと続いていた。糸は張り詰めて張られており男の……首へと繋がっている……。

数秒後、俺はすべてを理解することとなる。何故、男はしゃべらなかったのか。何故男の肩の力は抜け、腕がぶら下がっていたのか。

何故、男の背が高かったのか。何故、男の足がないのか。

そのすべてがひとつの答えへと結びく。

「う、う わああああアアア、ア、!!」

今までに感じたことがないの恐怖を感じるとともに俺は叫び声を上げた。

その場を離れようと必死でもがこうとするが、手足が竦んでまった

く言うことを聞かない。それが死んでいるのか、生きているのか考えなくとも答えは分かった。目の前の状況を拒絶しようと違うことを考えようにも、目の前の知りたくもない光景がすぐに目から叩き込まれる。

事実、今まで見たことのない人の惨い屍が目の前にぶら下がっている。

糸のようなものが食い込んでいる首からは黒い液大が流れ出し、男のワイシャツは紅に染まり、袖や裾からは雫が滴り落ちている。床には夥しい量の血液が水溜りを作っていた。

反射的に目を背けた。

ボタン！ガシャン！

大きな音が屍の方から聞こえた。

なんだ？何が起こってる？

視線が一瞬、屍方向に戻る。

（ない？）

さっきまであったはずの男の屍の姿がなくなっている。なんでだ？どこに行った？

宙には男を吊っていた黒い糸が宙で単振動をしている。

なくなる？そんなはずない。糸だってあるじゃないか？

視線をゆっくりと下へ落としていった。

なくなるはずはない。分かっていたことだが、できればなくなっていてほしかった。幽霊が出ていたほうが何倍もマシだっただろう。

あれは地面に横たわっていた。

うつ伏せに横たわっている“あれ”からは泉のように血液が流れ出しているのだろう。水溜りは倍以上の大きさになっており、黒い液体が近くまで迫っていた。

いったい何なんだ。何でこんなことが起こる。何で俺がこんなことに俺が巻き込まれなきゃいけない？どうすればいい？これからどうする？警察に通報？そんなことしたら、こんな時間にこんなところにいることを疑われるに違いない。逃る？そうだと早く逃げなくちゃ……自分を正当化し、ここから逃げる決意を固めた。

立ち上がるうと手を動かそうとしたときだ、右手に何か当たる感覚を感じた。鉄でも木でもない何か別の感覚。

何も考えることなく反射的にその方向を見てしまった。

それは楕円というには形がいびつで、毛のようなものが生えているのが暗闇でも分かった。近くにはあの黒い水の小さな水溜りができている。

「うわ、うわああああアアアア……！！！！」

いやでも目に入ってくる男の頭部。地面に横たわっているその頭部は俺を睨みつけている。暗闇の中微かに見える男の表情は死の瞬間が長く続いたことを意味するのだろう、苦痛に歪んでいた。

しかし何故だろうか、目から勝手に涙が零れ落ちるのを頬が感じ取った。

薄らとしか見えない歪んだ顔の中に何か懐かしいものを感じたのだろうか。

——その時だ。

バン！！

後頭部に強い衝撃を受けた。

「うっ……」

悲惨な光景が徐々に薄れて意気、目の前が真っ白になった……。

Episode 05 仏と鬼人

明るい光が眩しさとともに目に飛び込んできた。

目を擦り、ピントを合わせるように目を細めながら、俺は起き上がった。

気の向くままに腕を天に放り投げ、大きく背伸びをした。なんだろうか、周りからは笑い声——しかもかなりの大人数の笑い声だ——が耳を劈かんばかりに聞こえてきた。

いったい何が起こっているのか、頭の中は真っ白だった。夜の教室で男の死体を見つけて……それからだ。

そこから先が思い出せない。気づいたら……現在の状況に置かれている……。

俺はいったい何が起こっているのか理解できなかった。

分かることは、目の前でスーツ姿の男が仁王立ちで俺のことを睨みつけていることぐらいだ。

景色が霞んで見えるこの状況では、その男が誰であるかすら分からなかった。

「広瀬！ 私の授業がお前にとってたとえ退屈だとしてもだ！ 寝るんだったら静かに寝んか、この馬鹿者！」

朦朧とした視界の中、突然聞き覚えのある声がまた俺の耳を劈いた。ぼんやりとした視界からは、大きな眼鏡をかけた白髪交じりの渋い顔立ちが薄らと見える。

雰囲気からすぐに、誰であるか感じ取れた。二年間も毎日のように見ていた顔だ。

「何でいるんですか川田先生？」

「何でいる？ お前が授業中に『わああー』とか『うー』とか叫んでるからに決まっとるだろ——！」

俺の疑問に対してすぐ、川田は意味不明の回答を返した。

日が昇つてると言う事は、一夜明けてしまったのだろう。しかし、あんな事件の起こった次の日に普通授業なんてやるだろうか。そんなことが頭に浮かんだ。

暫く辺りを見渡した。口を押さえて微笑している者、俺に指を指し大笑している者、いろいろな表情の人間がそこには居た。クラス全員が確りと自分の席に座っている。

くたびれた時計、スチームアイロンの上に置かれた書物の山、壁に張り付いている掲示物。そこは紛れもなく自分のクラス、二年二組の教室だった。

人が死んだんだぞ？しかも首と胴体真つ二つにされて……この教室で……なんでそんなにみな冷静でいられる？

状況がより混乱した俺は川田に再び問いかけた。

「何が起こってるんです？俺は携帯をとりに……そしたら誰かが首を……」

寝起きすぐの所為か、上手く状況を説明できない。自分でも何を言っているのが良く分からなかったが、あの状況がどうなったのか、一刻も早く教えてもらいたかった。

「やべえーこいつまだ寝ぼけてるぞ！！」

俺の後ろから声が発せられると同時に、クラスにまた大きな笑い声が鳴り響いた。

修の声だ。

「犬養！茶化すのはやめんか！」

川田が強い口調で言うと同時に、クラスが静まり返った。

暫くの間、沈黙が漂った。

川田はいかにも自分の不愉快さを示すかのような表情を浮かべていた。

自分がかかわれているとも思ったのだろう。

「まあいい。寝るのは自由だが静かに寝る様に」という言葉だけ残し、黒板の方へ歩いていった。

ここで漸く状況を把握することができた。あれは夢だったのだ。こ

の状況ではそう判断せざる終えなかった。

もしかしたら、こつちの世界が夢なのかもしれない。そう思わせるほどの光景は目に焼きついていたが、あの世界は夢の世界であったほうが自分には都合がよかったのだ。

それほどあれは夢にしては鮮明すぎた……。

学校の構造、教室に戻った理由……すべての辻褄があっている。夢だったら一つぐらいおかしな点があってもいいはずだ。

あの世界に戻りたいなどという気持ちは毛頭なかったが、不思議でならない。

あれが夢だと決めたはいいが、本当に夢であるという確信が得られないからだ。

チラッと時計に目をやった。十三時四十五分。5時限目終了まで後5分だった。

5時限目で川田の授業。衝撃に押しつぶされて、微かに残るあの記憶と辻褄は合っている。

どこからが夢かなんて、考えたらきりがない。

机に倒れこむと終了のチャイムを待った。じっとしている五分というのは長いもので、ちらちらと何回も時計を見る。そのたびに、三十秒程度しか変わっていない時計に落胆しては、目を泳がせていた。黒板の前では川田が数学について熱弁していた。黒板は見たこともない記号でギッシリと埋め尽くされている。

そんな光景をぼんやりと眺めているとあることに気がついた。

黒板に書かれている文字列を説明しながら、ちらちらと川田はこちらの様子を伺っていたのだ。

最初はたまたまだろうと思ったが、何度も目が合ってしまう。そんな癪に障ることを俺は言ってしまったのだろうか。

自分に問いかけるが、答えが返ってくることはない。逃げるように外の景色へと、視線を移した。

そこには大きな入道雲があった。ひと夏にそう何回も見れないような大きな雲だ。

それは成長を続けているようで、留まる事がないその姿は見ていて飽きない。

暫し、その光景に見とれていた。

どのぐらいたったころだろうか、背中を軽く触れたれた感触が走った。

「……和也」

修が囁きながら俺に話しかけてきた。

俺はあえて無視した。川田がなぜか俺のことをマークしているからだ。

外の風景を見つめながらひたすらチャイムが鳴るその一時をまった。

「まさか、『仏』の川田があそこまでキレるとはな」

修は相槌を打つことを求めるかのように再び囁いた。

確かにそれは言えていた。川田はこんな些細なことで癇癢を起こすような先生ではなかった。

『仏』という異名のとおり川田が怒った姿はこれまでの二年間見たことがなかった。授業なんて、委員長とほか数名が目を輝かせて聞いている程度で、大多数の生徒の貴重な睡眠時間となっているほどだ。宿題なんてもちろん出されたこともない。テストにおいては、出題する問題まで教科書から指定するほどだった。

それ故についた異名が『仏』だ。数字を見るだけでも吐き気がする、数学嫌いな俺には、まさに仏に見えた。

修の話によると、川田が『仏』と呼ばれるようになったのは四、五年ぐらい前かららしい。

八年前に赴任してきた川田は赴任当初、『鬼人』とさえ罵られていたそうだ。生徒指導にも積極的に関わっていた当時を知る者たちは今でも頭が上がりないらしい。

仏が鬼人に代わった理由を修に尋ねると、「それは自分で考えろ」と言っ、決まっていつも口を噤んだ。

そんな話を、すっかりしなくなった最近、こんな話しは忘れてい

たが、『仏』が怒りを露にしたことで久しぶりに思い出された。

鬼人が仏になった理由も気になり始めたが、仏に目を付けられたことの方がこのときは大問題だ。俺はいったいどうなるのだろうか。

キンコンカーンコン……

そんな思考を遮るかのように、この日の授業の終了を告げる鐘の音が木霊した。

黒板に目を戻すと、そこに川田の姿はなく、教室は徐々に騒がしさを増していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2115b/>

Suicide Game -Kazuya's Mind-

2010年10月10日12時19分発行